東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2008 年 4 月 18 日

あなたがたがわたしの主に祈らないなら…

親愛なるムスリムの皆様。水が人間にとって命に関わるものであることを否定する人はいないでしょう。水のない地域で人が生きていくことは不可能です。従って人の命は水に、もっと正確に言うならその持ち主に、それをもたらす存在の慈悲や慈愛にかかっているのです。その為、クルアーンは多くの箇所で、水（雨）を慈悲と一体化したものとして記しています。言い換えるなら水は、慈悲の顕現として降ってくるのです。識別章では、アッラーは恵みと言う言葉を水と言う言葉の代わりに用いておられます。「またかれこそは、その慈雨を降らす前に、吉報の風を吹き起こす御方である。そしてわれは、天から清浄な雨を降らす。」（識別章第４８節）

私たちの父祖も、つい最近まで雨を「恵み」と言う言葉で表現していました。雨を恵みと呼ぶことは、秘められたドゥアーなのです。いつの頃からか、雨を恵みと呼ぶような考え方は消え去ってしまい、雨が降ったら面倒なことになったと言い、振らなければ災いだと言うようになったのです。

クルアーンの大権章は次の文章で締めくくられています。「言ってやるがいい。『あなたがたは考えないのか。もし或る朝、あなたがたの水が地下に沈み去ったならば、涌き出る水を、あなたがたに齎せるものは、一体誰であるのか。』」（大権章第３０節）そう、誰がもたらしてくれるでしょうか。

この問いかけをしているこの啓示は、「慈悲深いお方アッラー」と言う答えを求めるものです。なぜ慈悲なのでしょうか？水は、アッラーの限りない慈悲深さの象徴であるからです。そのお方の無限の慈悲深さ、慈しみ深さを象徴しているのです。

「ナッザラナー」という語は、「我はそれを下した」と言う意味になります。

この表現は、啓示を下されたこと、そして水を下されたことにおいて用いられます。啓示は奇跡でありそして水もまた同様なのです。啓示は生命であり、水もまたそうなのです。啓示は生命を持つものであり、水もまたそうです。啓示は渇ききった心に生命を与えるものであり、水は死んだ大地に生命を与えます。

ムスリムの皆様。水が生命をもたらすものであり、生命であり、奇跡であることを信じない人々にとって、水とは単に二つの水素と一つの酸素によって形成された化学的な合成物にすぎないでしょう。彼らにとって水はただ H2O なのです。「水素も酸素もある、あなたも水を作ってみてください。」と言えば彼らはとまどうでしょう。水が神聖な恵みであることを考えない人は、それが奇跡であることをも認めないでしょう。ちょうど、持ち主のいないラクダを渇きのうちに放っておき、預言者ムハンマドがそのラクダの水を飲む権利を守ったことに対し腹を立て、ラクダに拷問を行なって殺してしまったサムドが、自分達がその為に滅亡させられたということを知らなかったように。こういった人々に、恵みをもたらすものとなるドゥアーについて説くことは、中東の地域で言われているラクダに溝を跳び越させるのと同じくらい困難でしょう。

ムスリムの皆様。今日のフトバを、慈悲への媒介となるドゥアーがどれほど重要なものであるかを示すクルアーンの言葉で締めくくりたいと思います。「あなたがたがわたしの主に祈らないなら、かれはあなたがたを、構って下さらないであろう。」（識別章第７７節）